九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古訓漫談

春日，政治

https://doi.org/10.15017/2557131

出版情報：文學研究. 2, pp.131-152, 1932-10-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

古訓漫談

春日政治

一

今度は何か纏まつたものを書きたいと思つて、この夏わざわざ東の方へ出掛けて行つたのに、或偶然の故障の爲に、目的の書物が見られなくなつたので、遂に其の稿が完結しなかつた。邊陲に居る者の、書物に不自由を感ずることを察していたゞきたい。京の書寢にも劣ると譏られた田舍に於ける學問の苦心を憫んでいたゞきたい。とにかくそんな次第で取急いだ間に合せに、古訓點の中に遺つてゐる音訓について、自分の面白いと感じた或物を漫然記して見たいと思ふのである。

先づ音韻の方面から始める。我が國語は短母音の連續から成立つてゐて、長母音の表れは普通にはないといふのが、本來の性質であることは認めてよからう。しかし實際に長母音が發音されなかつた譯ではなかつた。先づ感動詞の如きものの長く發音されたらうことは、想像し得ることでもあり、亦古事記の歌のエ(引音)シヤコシヤ、アア(引音)シヤコシヤ、書紀のアア(引音)シヤヲ、若しくは祝詞式に神主祝部等の稱へるといふオオ(唯)などを以ても、大凡そ推測される所である。次に謠物(琴歌譜・催馬樂譜など)の節に長く引く音の存在したことは、其の譜に示されてゐること、是亦言ふまでもないが、日常普通の語彙でも實際長く發音された例は間々古い物に見えてゐ

る。この事に就いては、我が師吉澤義則博士が「唐鈔漢書楊雄傳訓點」について言はれた所であるが、私も目に觸れた一二について續貂しようと思ふ。奈良朝の書寫と見られる華嚴音義に蚊に加安と假名づけられ、（承曆三年寫最勝王經音義にも同樣加阿とつけてある。）昌住の新撰字鏡に

鈞　居脣反卅斤爲鈞也法也知伊也

杼　除呂反機持緯者比伊

などと見えることは、世人の周知する所である。地名の紀伊・都宇・顯娃・嚫欸などの音は元來一音節のものを、故らに二字に書いた爲にかうなつたのであつて、發音は必ずしも長くはなかつたとも言はれようが、とにかく我が國では古代でも一音節語を長く發音し勝ちであつたことは、音義や字鏡の例でわかることである。近畿を中心とした地方に一音節語を長く發音したがる癖の顯著に表れてゐるのは、其の起源が遠いと言はなくてはならない。さうして此の傾向は强弱の差こそあれ、一般日本語の音韻的特質と見てよいであらう。

この事實の古訓點に表れたものに就いて見ると、固有國語の例の極めて稀であることは、吉澤博士が漢書楊雄傳天曆點について言はれた如くであつて、彼處に擧げられたミイ（覽）などの如きは珍しい例と言つてよい。尤もそれも平安朝の終に近づくと多少表れて來るやうであつて、例へば

咄　ヤア　沼　ヌウ　（長寬本大般若經）

咄嗟　ヤア　（岩崎文庫本日本書紀）

輪　ワア　（法華單字）

不滅　ケエ（ズ）　（東大寺本涅槃經）

の如きは是である。

音韻上のこの性質は合成語を作る上にも及んで、上に一音節の語を置く時は、其の音を長くすることが保たれてゐる。例へば現代語で數詞を呼ぶのに、ミツ・ヨツ・

ムツ・ヤツだけが促音になるのも、もと上を長音にした一種の變形のやうに考へられる。ムウツ・ヤアツなど言ふ地方のあるのでも知られる。日を數へるミツカ・ヨツカ・ムイカ（又はムユカ）・ヤウカなどいふのも同一原則からであらう。日本書紀の古訓に六口や六人をムユタリと讀んだ例などを見ると、是等も古いことであるらしい。しかし古訓點にさう記された例は未だ見出せない。元來數詞を表す漢字は、文字として最も簡易なものであつて、何人も其の讀方を熟知してゐるので、假名附けの必要がないからであらう。

二

ヤウカ（八日）に形の似た語でヤウヤク（漸）といふ語があるが、此の語は古訓點の中で比較的早く表れてゐるものであつて、恐らく音便語として最も早く表れたものの一つであらう。かの元慶點地藏十輪經には徐行・徐問などの徐の字、浸達などの浸の字を共にヤウヤクと假名づけてある。この經には已にイ音便やウ音便の語が見え出してゐるが、この語が其の中の一つである。しかしこの經よりも、否天長點成實論よりも古點と見られる願經四分律にも、一二のイ音便語と共にそれが見えてゐる。

徐徐 ヤ宇ヤ久

とあるのが是である。

試みに十輪經以後のこの語の表れてゐるもので、私の注意したものを擧げると、

微ヤ（ウヤク）ニ　徐ヤウ（ヤク）ニ　（天曆點漢書楊雄傳）

徴ヤウヤク（徴は微の誤寫）　（應和點求聞持法）

徐徐ヤウヤク　（寬仁點金剛頂蓮花部心念誦儀軌）

寖ヤヤ〳〵クニ　（天永點白氏文集）

微ヤウヤクニ　潜ヤウヤクニ　（同右）

微ヤウ〳〵　寖ヤウ〳〵ニ　徐々ヤウ（ヤウ）ニ　（同

右）

徴　ヤウ〳〵ニ　ヤウヤクニ　（徴は徴の誤寫）（保延本春秋經傳集解）

薄　ヤウ、、　（岩崎文庫本日本書紀）

幾　ヤウヤクニ　（建治本古文孝經）

稍　ヤウヤクニ　（康永本遊仙窟）

なぞである。之を通覽するに、平安朝の後期の方にヤウヤウが表れて來ることが知れる。之を假名文に徴しても土佐日記に

かくいふあひだに夜やうやくあけゆくに、……

とあるのが、（貫之本も流布本も皆かうなつてゐる）未だヤウヤクであるが、源氏時代になるに殆ぎヤウヤウとなり了るのである。それ故ヤウヤウはヤウヤクから訛つたものと見るのが至當であらう。

次にヤウヤクといふ語の發生については種々論のあるところと思ふが、本居宣長翁が、古事記傳に於て說かれてゐる所は次の如くである。（本文、衝御杖稍歩）

稍は夜々夜々爾と訓べし。萬葉五四十丁に、須臾毛、余家久波奈之爾、漸々可多知都久保里、七十八丁に奥津梶漸々爾永手（略）とあり。漸は常に夜宇夜久と訓れども、（略）此言古書に正しく書る例なければ、さだかに知りがたきを、よく考ふれば、夜宇夜久は夜々夜々の音便に轉り訛れるなりけり。（細注、右の萬葉なる二ッ共に漸々と重ねて書るも夜々夜々と重なる言なる故なり。さて夜々夜々を音便に夜宇夜宇と云るなり。中古の物語書なぞ、又今世の言にもやう〳〵と云り。然るを漢籍なぞを讀むにはやうやうは何とかやはかなく聞ゆる故に、下の宇を久と讀ならはして夜宇夜久とはなれるなり。其はやうやうと云は、能（ヨク）をよう、如此（カク）をかう、疾（トク）をとうと思ひて、さは讀なせる物なるべし。）（古事記傳二十八ノ三十六丁ウー三十七丁オ）

歷朝詔詞解の三十一詔の漸漸の條（四卷ノ四十二丁ウー四十三丁オ）にも同樣

の事を言はれてゐる。ヤヤはイヤヨと同義のヤの疊語であるが、萬葉集の漸漸は翁の言はれるやうに、文字を重ねてもあり、かつ音數の關係上、ヤヤを更に重ねてヤヤヤヤニヨと讀むべきことは肯なはれる說であらう。しかしヤウヤクの出來方については尙論の餘地があるであらう。翁はヤヤヤヤからヤウヤウが生じ、それが形容詞音便の逆類推からヤウヤクとなつたのだと說かれる。是は先づヤウヤウが出來て次にヤウヤクになつたとするのであるが、事實は已述のやうにヤウヤクが先でヤウヤウが後らしい處に難を生ずる。殊に他の形容詞のウ音便の未だ發生しない先に、かかる類推が行はれようかといふ疑をも挿み得る。なるほどヤウヤクが意義上からも形態上からも、ヤヤ又はヤヤヤヤから出てゐることは認められる事實であり、それが語末にクを取つたことは他の副詞のそれに類推したことは亦認めてよい。しかしヤウヤクからヤウヤウとなつたのが事實であるとすると、ヤウヤウより前のヤウヤクの出來方を考へ直さなくてはならない。處がそれを明かに說明してくれる材料はない。私はそれがヤヤヤヤから來たか、はたヤヤから來たかも問題になり得ると思ふ。現に言海は、如何なる過程によるかを明示してはゐないながら、ヤウヤウといふ語を「稍ノ延」としてゐる。天永本白氏文集のヤヤ〳〵クニを古形と信じてヤヤヤヤにクの附いたことをコトゞ〳〵クなどと同一視し、それから一音がウとなり一音が落された（其の先後も論はあるが）と考へるのも一說であらう。又ヤヤにクが附いて上のヤがヤウカのやうに延びた（其の先後も論がある）と考へるのも一說であらう。尙よく考ふべしである。

疊音語の事で思ひ出したが、私の舊稿「金光明最勝王經の古點について」（日本文學論纂）のハナハナ（甚）の訓に就いてである。（同書三三三頁參照）彼の稿を草した時、同訓を他の何處かで見たことのあるのを仄かに記

憶してゐたが、如何しても考へ出せなかつたのに、この頃建治本古文孝經（古典保存會刊本）を見るに出て來たのである。實は曾てこの本を見た際、朱墨で點を打ち、かつ態々欄外へ摘出して置いたのに何時か忘れて了つてゐた。記憶の衰へを悲しみ且悔しがつた次第である。それは「要君者亡上、非聖人者亡法、非孝者亡親」といふ本文の註であつて、其の終の部分に、

三者皆不孝之甚也（ハナ〳〵シキ）

とある。こゝには餘事ながら、此の機を以て補入して置くことにする。

三

ヤウカの事から思はず岐路から岐路へと迷ひ込んだが、立返つて漢字音であつて一音節を長呼する例は、固有國語と違つて相當豐富に見出される。吉澤博士が漢書楊雄傳から引出された例だけでも、其の數十に上るのである。元來漢字音は支那人から授かる際に、之を長く敎へられた點もあるであらう、殊に佛徒の讀經にはこの長呼が多いやうであるが、字音の長呼はそれが普通の語にも這入つて來てゐる。お主をオシュウといひ、女房をニョウバウといひ、彼のシイカ（詩歌）・フウキ（富貴）・ケイシ（家司）などは殆ど長音になつて了つてゐる。而してかうした事も隨分早い時に起つてゐるのである。私の見た訓點物の中に、正倉院御本最雲寫央掘魔羅經といふのは、其の加點年代を明かにしないが、其の假名字體を見るに、イ・ウ・ヘ・ム・リ・ル・頁（ス）・ソ（ソ）・セ（タ）・矢（チ）の十の省體の外は、全部眞假名を以て記されてゐる。由つてこの加點は或は奈良朝末期かとも考へられ、晩くも平安初頭と推定して大きな誤はないものであらう。而して殊にこの經の加點の珍しいことは字音を假名書にしてある點であつて、蓋し此の種のものの最も古い一つと見てよいであらう。其の假名訓に次のやうなのがある。

屣 リイ （履の字と誤つたものだらう）

こあつて、長音表記である。次には西大寺本金光明最勝王經であつて、其の加點は天長前後と見られるものであるが、之には隨分豐富にある。

歌舞 カアフウ
言詞 〇〇シイ
捨棄 シアキイ
八支戒 〇〇シイカイ
蠱毒 コオトク

などが是である。是等を吉澤博士のものと併せて見ると一音節の字音を長呼するここは殆ど通則と見てもよい位である。尚大矢博士の假名史料の内その他から一二拾つて見よう。

魚菟 〇〇トウ （法華文句）
蛆螫 ソオシヤク （寛仁點成唯識論）
鑠 サア （承暦點金剛界次第）

郁枫 チイクワイ （長寛點高僧傳）
華 クワア （法華單字）

などの如きである。

さて前出の例の中捨棄の附訓にシアキイとあるが、拗音の表記の變つてゐるここに注意される。現今の拗音表記法はキヤ・キュ・キョのやうにヤ行文字を用ゐ、又ヤ行拗音などとも呼んでゐる位であるが、古くは二重母音やうにア行母音を附けるここになつてゐたらしい。これは漢字の古原音を考へるに資すべき材料であるであらう。已述の央掘魔羅經の字音には、拗音字に、

詳生 清初 辟白 臭首

などのやうに類音を以て讀若に附けてあるものが多いが、一音一字の假名書きを以て附けてあるものに、このア行拗音ともいふべきものが見える。

歷 リ阿口
壞 爾阿字

なぞの形が是である。尙その內、

嬰　□阿宇

こいふのがあるが、初の假名が不明であつて、伊のやうにもあり、又依のやうにもあるが、（恐らく伊であらう）こにかく阿宇だけは明かであつて、現今ならばヤウこ附けるべき所が二重母音やうになつてゐるのである。更に面白いことは、

溺　二惡

の一例であつて、ニアクこ讀むべく、現今ならばニヤクこ書くべき所であらう。和名抄には蒟蒻を古邇夜久こ記した例もあるが、正に同音字であるのである。

次に唐寫阿毘達磨雜集論古點も平安初頭のものこ認められるが、その中に注意すべきは、

如應配釋　波已志阿久訓阿互々說

こいふ白訓である。是は

ハイシアク訓アテ、說ク

こ讀むべきものであるが、是が亦シアクになつてゐるのである。此等の例はア（今のヤ）の場合のみであつて、ウ（今のユ）・オ（今のヨ）の場合は表れてゐないのであるが、偶然であるか、或は理由の存するかは明かでない。尙この雜集論には、

奚根　め阿爾

こいふのが見える。初の假名は平假名のめの字のやうに見えるが、奴の字の草書の末畫を省いたものであつて、ヌこ讀むべく、從つてヌアニこ讀まれ、奚字の音である。奚字はもこ輭字こ同じく今ナンこ發音するが、韻鏡に於ける合轉の字であつて、支那の今音に於ても Juan こ發音する如く、nuan こ原音に近く發音した昔の俤が見える。古代に於ては漢字の音が今日よりも原音に近く、より細密に發音された跡が解るので我等の興味を惹く一つである。

元來我が國古代に於ける拗音の假名表記は何時頃一定

したか、不明であつて、其の初は類音字で附けることが多く、已述の央掘魔羅經についても見た如く、

洲渚守所（雜集論）　羹香反　裝生反（願經四分律）

整正　舍者　謫者反（十輪經）

などのやうなのが多い。かくて拗音は我が假名表記に於て成るべく避けられてゐた傾向が見える。和名抄の如きも、和化した字音語を讀む時、拗音には大概類音字を借りたのであつて、偶々假名書にしても、拗音をば避けて、慈石を之蛇久、砷磲を謝古と書く類が多い。古邇夜久などは珍しい只一つの例である。さて願經四分律に

若ニヤ　渚ショ

とあり、法華文句に

顯々キョ〳〵

などあるのは、拗音のヤ行表記の早いものであるが、隨分後代までこのア行表記は見えてゐるのであつて、

依馮　〇ヒオ反　（正倉院御本菩薩善戒經）

遮止　シア（シ）セシム　（西大寺本金光明最勝王經）

法律　〇〇リウト　（同右）

逆　キアクス　（同右）

沃壤　〇〇ニアウ　（同右）

覬覦　キイウ　（延曆本大唐西域紀）

などは、前揭の例に次ぐ古いものであるが、壤字の音の如きは正に央經と合ふものである。

庾　イウ　（長寬本高僧傳）

祥　シアウ　（治承本性靈集）

などは、隨分後まで拗音のア行表記のあつたことを物語つてゐるものである。

四

防字は今フセグと讀むが古くは種々の訓があつた。即ちこの語に種々の發音形があつたことになる。書紀の古訓を見るとフセグと共にホセグとも附けてあることは誰も知る所である。

如吾防禦（ホセカマシカト）者、國内諸神必當同禦（ホセクヘシ）（丹鶴本神代紀）

そこで古訓點に於けるこの語を調べて見るに、先づ奈良朝の鈔本に認められる華嚴音義には、

防　浮妄（反）ル布世久

とあつて、古くからフセグといつたことは確實である。次いで奈良朝に近い訓點物に他の讀方が表れて來てゐる。正倉院聖語藏御本景雲寫華嚴經の加點は少くも平安朝初頭を下らないものと見られるが、

無所拒　不世具

とあると共に、

防御諸敵難　保曾久

とあつて、ホソグといふ訓が見える。つまり兩形あつた譯である。さて同じく聖語藏御本唐寫阿毘達磨雜集論の古點は之に次ぐべきものであるが、是亦、

如理詰責彼　波々目布セク

遮防一切損害逼迫惱亂他　保曾个ゝゝゝ

となつて、やはり兩用である。天長五年點成實論には、

如善守備則惡人不入　呆ソク

とある。この兩形の意義に多少の差のあるものか否かは餘り明瞭でない。尚、法華文句古點にも

防　ホソク也（白點）　防　呆曾久（朱點）

とあるが、元慶元年點の地藏十輪經に至つて

防諸怨敵　ホサク

といふ新しい形が表れて來てゐる。ホソグとフサグとを掛合せたやうな形である。このホサグといふ形は長寬元年點の大唐西域記などにも見えてゐる。

しかし後代のものにはホソグやホサグは漸次見えなくなるやうであつて、辭書の名義抄や字類抄などにも見出せない。又訓點物にしても、

御之フセク　以禦公徒フセイ　不足以御亂フセク（保延本春秋經傳集解）

遠防之也　フセク（建治本古文孝經）

應拒得（フセキコハミ）（康永本遊仙窟）

なごはフセグのみでホソグもホサグも見えないのである。かくてこれらの語はフセグだけが用ゐられ、他は亡びて了つて、現代に至つたもののやうである。

書紀の古訓のホセグといふ形は、私は未だ訓點物の中に見出せない。元來フセグといふのだから、ホセグといふ形もなかつたとは言へないが、之は或は假名の見誤り、讀誤りではないかと思ふ。古假名の一體にはサの字に左の草書の頭だけを取つた七に似た文字があつて、之が平安朝から德川時代までも用ゐられゐたが、後世人がそれをよくセと間違へたものであつて、この防字の附訓にホセク（即ちホサグと訓むべきもの）とあるのをホセグと誤讀して了つたのだらうと思はれる。かく文字を誤讀した爲に新しい語を造ることもあるのである。

さてこのフセグ・ホソグ・ホサグは何れが先で何れが後かといふ發生の順序については遽には斷じ難いが、以上の資料を並べただけではフセグからホソグが出來、更にホサグが出來たかのやうにも見える。それは何れにしても或原語があつてそれが漸次訛つて行つたものと見なくてはならない。元來日本の音韻中母音の動搖、即ち所謂縱行（タテ）の通音（カヨヒ）といふことは古語にはより自由に行はれたやうであつて、同一子音を語根として種々の語に分化して行くことも一にこの母音の動搖によつた。フセグもフサグも、乃至ホソグもホサグも皆その意義に同一性を共有してゐる語同士である。フセグはフサグと同じやうに通路を狹める義から出てゐるやうである。かくてホソシも同一語源から、ハサムも恐らくさうであらう。ヒシグも物を他の物の間に狹めることである。ヒシ形もヒシ（植物）も亦必ずこの同族であらう。

さてこの母音の動搖の中で日本語にはよく同母音を揃へる癖がある。母音同化とか母音諧調とかいふものであつて、ハサムもヒシグもホソグ・ホソシも皆母音の調子

を合せてゐる語の例であるが、我が古典には著しくこの音韻傾向が表れてゐる。さうしてそれが原始的言語であるほど強いやうに思ふ。アナニいふ感動詞と共にオノニいふそれがあり、カワラニいふ擬聲語と共にコヲロニいふそれがあり、固有名詞にしてもオノゴロシマがありイチキシマがある。更にコホシ（戀）といひ、（萬葉二十にクフシクともある）イキドホロシといひ、オロス（織ラス）といひ、ワゴオホキミといふなどが皆母音同化の跡を止めてゐることは誰もよく知る所である。さて古訓點物を見るに、やはりさうした音韻現象が相當見えて、今日我々が言剏された語彙の形を標準にした時、何となく俗訛音であるといふ感を懷かせるそれらがある。

懷　布都久呂　（華嚴音義）
住　トヾモル　（成實論天長點）
誑　又ハ　詐　タボロカス　（地藏十輪經元慶點）
呑　トブルヒ　（同右）
喜　ヨロコボシキ　（地藏十輪經元慶點）
送　ウクリ　（法華文句古點）
佯　ウツハリ　（金剛般若集驗記古點）
隆　ウズツカナル物　（正倉院御本十二門論古點）
動　オゴカス　（法華義疏長保點）
御弓　オタラシ　（九條本祝詞式）
事　ツクマツル　（金剛界次第寬治點）
戀　コロス　（白氏文集天永點）

なごは、私の注意した或物を書拔いたのである。この內トドモルは成實論より古い加點と見える願經四分律や阿毘達磨雜集論に見える。オゴカスは金剛界次第延久本、同寬治本、阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌嘉保本・三藏法師傳永久本・金光明經天承本なごに見え、源重之集や保憲女集にオゴクといふ語があり、名義抄にも同訓語のあるのと併せ考へて廣く用ゐられた語のやうである。コロス（戀）は三藏法師傳永久本・十七憲法承

安本等にも見え、又假名文では打聞集などにも見えてゐる。さて是等の内には、或は今日の形よりも却つて原形と見るべきものもあらうが、それらの檢討はこゝには省くこととして、ヨロコボシは續紀の宣命に與呂許保志といふ假名書があるから、之がヨロコバシよりも古いらしく、誰の字は西大寺本金光明最勝王經にはタボラカスとあるから、何れかが訛つた形であらう。而して其のボの音だけは今日のブより古形であるかも知れない。住字の訓は雜集論には

无レ滯故　（トヾモル事無キガ故ニ）

とあり、四分律には

住待二日足一　（トヾモリテ日ノ足ルヲ待チ）

とあるから、共に自動詞、今のトドマルであることは勿論であるが、成實論では

心住二一處一是三昧相　（心ヲシテ一處ニトヾモル是レ三昧ノ相ナリ。）

こやうに讀まれて、意味に多少疑があるが、原文の配字の通りに、心が一處に止まるといふ事で、トドモルはやはり自動詞であらう。こにかく相當に用ゐられた一種の變訛音であつて、亦それが母音同化によるものと見なくてはならない。

私はこゝに於て萬葉集卷三の

留火之　明大門爾　入日哉　榜將別　家當不見（二五四）

といふ歌の留火の用字法について僻案を試みたい。萬葉集にトドマルを假名にした所がないが、トマルといふ動詞の假名書はあるから、トドマルといふ語もあつたに相違なく、留有（一四五三）をトドマレルと訓じてあるのは差支ないやうに思ふ。しかし前述の如く經卷の比較的古い訓法がトヾモルといふ形を止めてゐるのであるから、萬葉時代にも或はトドマルと共に一方にトドモルといふ形も行はれてゐたのではなからうか。從つてトマルと共

にトモルといふ變訛形も存在してゐたのでは無かつたらうか。愚考は此の點に根據を置くのである。

さて留火を舊訓トモシビとしてあること、言換へるとトモシビに留火の字を假用してあることについては說が區々であつて、未だ妥當な解釋に達してゐない。契沖は代匠記精撰本に於て、

此留火ヲトモシビト點ゼルヤウイマダ意得ズ。

と言つてゐる。久老は槻の落葉に於て一說をなして、

こまりといふ訓をかりたらば、こもり火とよむべし。母と麻とは、通はしいふ例おほし。

と言つたが、由豆流の攻證は之を反駁して、

こもりびと訓つれど、語の活用（ハタラキ）にうときにて非也。いかにとなれば、留の訓はこみ、こむ、こめと活用て、まの字よりは良行にうつりて、こまらん、こまり、こまる、こまれと活用、もの字よりは、左行にうつりて、こもさん、こもし、こもす、こもせと活用故に、留をこもしとよむべき事論なく、こもり火といふ事あるべからず。（萬葉集叢書第五輯に據る）

と言つてゐる。久老の說のモとマと通ふことは許してもよいとして、他の皆トモシビであるのに對してトモリビなどいふ語の宜なひ難いことは言ふまでもない。しかし由豆流の說には少からず亂暴な點がある。といふのは留字を訓ずる時、之をマ行四段のトムとしたり、サ行四段のトモスにしたりするのは餘りに勝手すぎる。留字は自動にはトマル（又はトドマル）といふラ行四段、他動にはトム（又はトドム）といふマ行下二段より外訓じやうがないからこそ、流石の契沖も困られたのではないか。併し久老のトマリをトモリと通はせたのも或事實に近づいてゐる。現にトドマルをトドモルと訓んだ例があるからである。而して由豆流の留字をトモスと活用させたのも亦或事實には近づいてゐる。畢竟萬葉集のこの場合

はトモシと借りられてゐるからである。

然らばトモスと訓まれない留字を如何にしてさう借用したかが説明されなくてはならない。そこで私は前述の古訓法の實例をかりて、留字は萬葉時代にもトドマル又はトマルとトドム又はトムとに訓まれ、其のトドマル・トマルの方は同時にトドモル・トモルとも訓ぜられた（要するに兩形の同語が存在した。）と考へるのである。已にトモルと訓むとしたならば、留字を火のトモル（自動）に假用されることは可能であり、已にトモルに假用された以上、延いて其の他動にまで同字を假用して、トモシと讀むことは、正訓の一字が常に自他兩樣に讀まれるのに類推して成立ち得ることであらう。簡單に言へばトモルといふ訓のある留字をトモルの他動トモスに假用したといふだけである。因みに古義の留は燭（燭字の傍）の誤であるといふ説は私は取らない。

トドモルについて更に聯想されるのは、萬葉集の巻五に見えるトドミといふ語形である。この巻にはトドムの連用形を等等尾・等登尾・等騰尾として、三つ共トドミである。舊訓にトドメの假名附けがしてあり、尾はメと訓めといふ木村博士の字音辨證の説もあるが、尾の字の他處の用法から推して、メと訓むのはやはり無理のやうに思はれる。巻九には夕鹽之、滿乃登等美爾、三船子呼阿騰母比立而（一七八〇）といふ同語の名詞形らしいものが見えるが、之は尾と美と假名遣か違ふから全く同語とすべきや否やは疑問である。しかし是等を以て直にトドムを上二段・下二段兩用と認め、或は四段活用であるとするのも如何かと思ふ。この語は他の巻々の例に據ると、未然に留目六（四）、等杼米牟（十四）、連用に等登米弖（十五）、布禰等米弖（十五）、等騰米毛可禰底（十七）連體に等登牟流（十六）などあることから、下二段と認めなくてはならない。それ故連用形の場合の訛り、而も或は個人的の訛りであると解すべきであつて、たとひ其

の原因は異なりこするも、トドマルがトドモルこ言はれるのこ同じく一種の訛りであらうこ思ふ。（補注）

思はず話が轉々こして本筋を棄てて了つたから、こゝで初の母音同化に立復つて一往結ぶことにするが、かの法華文句古點にはハビコリ（蔓）のホビコリこなつた例がある。之などは、音節を隔てての諧調らしい。尚ヨモヤモをヨモヤマこいふのは前半こ後半この對立的口調から母音同化を行つたものであるが、長寛二年寫の大般若經字抄に、

幾所イクハク　幾許同上　爾所ソコハコ　爾許同上

こ見えるものの如きは、兩語の對立的口調から來てゐるかも知れない。かうして母音の調子を合せる言語の變化原理は、相當訛りらしく聞える語を吾等に見せてゐるのであつて、從つて或語の原形を考へる時、この原理を逆に用ゐることに由つて獲られる場合もあるのである。成實論天長點は「自大自高」こいふ大字をフトビこ訓み、高字をタカビこ訓んでゐるのであるが、そのフトビこそやがて伊勢物語の

餉の上に涙おこしてほこびにけり。

のホトブこなつたものであらう。

五

語彙の新古こいふことは、分るやうでなかなか分らない。それが又辭書などでも未だ分つてはゐない。其の一例こしてカラダこ言ふ語を擧げるが、此の語は體軀をいふ今日の標準語であり、かつ全國殆ど何處にも通用されるものこ思ふ。しかも其の古さを聞かれるこ誰でも頭を傾けるであらう。而して吾等普通人には何こなく俗語であるこいふ感を起すであらう。現に倭訓栞は

からだ　軀殼の俗語也、殼立の義なるべし、家を建るにからき立なごいへり。

なご言つて、之を俗語こしてゐる。俗語こいふ意味には、雅正な文語に用ゐられないこいふことこ共に古語で

はなくて、少くも後世の變訛か發生であるといふことを豫想し勝ちである。和名抄には無論カラダといふ語は出てゐないが、狩谷棭齋は、その形體部第三身體類十七で肢躰といふ語の下に、體の字の箋注をして、

易繫辭傳、易無體、正義云體謂形質之稱、即是義、今俗呼加良太是也。

と述べ、やはり俗語としてゐる。なるほど、それが久しく文語に入らなかつたにせよ、しかし此の語の隨分古い起源であることには驚かされる。已述の元慶點地藏十輪經の序には

體權實之同歸矣　カラタ

の如く明かにカラタと假名訓を施してある。それからこの十輪經よりも、かの成實論天長點よりも加點の古いと推定される景雲寫菩薩善戒經（正倉院御本）には、

膚體細滑　カハヘカラタナメラカ

とあつて、同じく體の字にカラタの假名を施してある。しかし體字をカラタと訓ずることは、後のものには一向見えない。字鏡・和名抄・名義抄・字類抄などにも出てゐないのであつて、平安朝の物語文などには體を指すにミ・カラ・ムクロなどが專ら用ゐられたのである。大智度論天安點にも體をムクロと訓じてゐる。カラダといふ語はカラにダの副はつたものである。ダはハダ（膚）・エダ（枝）などのダであつて、或意味をもつた接辭であらう。ムクロは無論ミカラ（身幹）であらうから、之とも互に相通ずる語ではあるが、それが平安朝の文獻には殆ど見えないのである。然るに應永頃の作だらうと言はれる秋夜長物語に

むなしきからだなりとも、ひとめみてのちにこそ

とあるといふことを物集博士の日本大辭林から敎へられたので調べて見ると、こゝは類從本も寬永十九年本も皆「しがひ」（シガイ死骸）となつてゐるから、異本にはさうあるとしても、原形であるか否かは明かでない。そ

れは何れにしても、この語は何處かに生きてゐたに相違ないのであつて、言語は文語として標準語として（即ち雅正の語として）用ゐられなくとも、千年の生命をもち續けてゐることがあるものである。

カラダについて聯想されるのは、痩セコケルといふ語であるが、このコケル（古くは下二段のコク）はやはり俗語感を伴ふ語となつてゐるが、亦平安朝の初期に見えてゐる。勿論ヤスと同義の語としてである。それは大矢博士の願經四分律古點に

形體黑痩剝裂　クロミクケハサケテ

と假名づけてあるのがそれである。尚下に之と全く同一の文句の痩字をヤセと訓んであるから、全然同一義であることは言ふを待たない。即ち古くククであつたものが、ウからオへ移つてコクと變じたものらしい。辭書では落合直文氏の圖書辭典（明治三十五年）に無名抄の

たゞしなかれぬるといふことばこそあまりこけすぎ

ていかにぞやおぼえ侍るといふを……

といふ文を引いたのなどが初であらうか。ソラガマチのカマチなども古い語であつて、天安點大智度論には頰車に力万千といふ訓が見えてゐる。亦古い語である。因みに同經には沸の字にタキルといふ訓があつて、大和物語の「風吹けば沖つしらなみ」の女の情火に、

さればこの水、あつ湯にたぎりければ湯ふてつ。

などいふ誇張の可笑しさを思ふと共に、この語の今に生きてゐることを思ふのである。

六

語法の問題にしても、一語の或形が文献の上に見出されないとすると、其の形が存在しなかつたとしなければならないものの、それが偶然文献に表れなかつただけであつて、實際は存在したかも知れないといふ餘地を置かなくてはならない。古典が研究されるに從つて、新しい語形の資料が掘出されることがあるからである。

ゴトシといふ語は形容詞活用をするけれども、古來ゴトケレといふ已然形を缺いてゐるとか、ゴトカリといふ形容動詞形は取らなかつたとか言はれるが、之も畢竟文獻に見出し得ないからである。文獻に見出し得ないことは用ゐられなかつたことの表れでもあり得る。この語が實際形容詞の全活用形を取るまで發達を遂げなかつたかも知れない。殊に形容詞のケレ形が後の發達であるから、準形容詞ともいふべき特別な語ゴトシが、之を取るまでに至らなかつたとも言ひ得る。しかし言語が、殊に語法が或度まで類推の原理の上に立つて動いてゐる以上、よしそれが認められた雅正の表現でないにしても、或個人にはゴトケレともゴトカリとも用ゐられたかも知れないといふ推測は許されてよいやうに思ふ。實際現代人の文語文には個人的にさうした形を見受けないこともないからである。

其のゴトシに就いて一例を擧げるが、西大寺本金光明最勝王經古點には、

若シ有ル苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦及ビ餘ノ善男子善女人等ノ、供養シ恭敬シ書寫シ流通シ、人ノ爲ニ解說センヒトノ所獲ノ功德モ亦復是ノ如ケム。（卷十）

と訓まれる個處がある。ゴトケムといふ訓法は珍しいやうに思ふ。元來この古點に於ては形容詞の未來形にこのケムといふ形が可なり見られる。殊にナケムなどが最も多いやうである。

餘ノ衆ミノ苦難ヲモ皆除滅セズトイフコト無ケム。（卷一）

此ノ林ノ中ニ將ニ猛キ獸アリテ我ヲ損害スルコト無ケムヤトイフ。（卷十）

於レガ中ニ少分ヲバ尙知ルコトハ難ケム。（卷五）

所護ノ功德ハ其ノ量リ甚ダ多ケム。（卷六）

恒河ノ駛ク流ルル水ニハ、白蓮華生ズ可ケムヤ。

(巻二)

なぞの如きである。一方にカラムこいふ形の用ゐられることは言ふまでもない。それ故これらこ類推して、ゴトケムはあり得ることである。

しかし茲に「如是」の訓法については、今少し用心深い考察が拂はれなければならない。先づこの個處に於ける「如是」の點は、如字の中央下部に个（ケの假名）こ附けてあるだけであつて、是字には何の點も附いてゐないのである。元來この經の乎已止點の線點の內、文字の中央下部の横線がムの位置であつて、若し其の位置に假名を以てナを書けばナム、ラを書けばラム、ス（爲の代表點）を書けばセムこなるのであつて、ケの書かれてゐる以上如字の語尾をケムこ讀むことだけは動かない所である。而して此ケムは過去の推量たるケムであり得ないことも、文意上明かであつて、ムは未來、ケは如字の活用語尾でなくてはならないやうである。

さて他の場合に於ける如字がク・シ・キの語尾を送つて如シこ讀まれることは疑ないが、只「如是」こいふ文字を此の經で何こ讀むかは甚だ明かでないのである。「如是」の如字にはキ・クの假名を送つてあるものは多いが、是字には殆ご何の乎已止點も假名點も附いてゐないからである。この經巻一の巻首にある「如是我聞」を

如キ（假名點）コトヲ（乎已止點）是（施點がない）我レ聞キタマヘキ

こある。この如是を普通の例に由つて「是ノ如キコトヲ」こ訓んだこして、實は是字がコノかコレノかカクノかも別らない。全十巻を通じて只一個所是字に點のある所があつて、

是ガ如キ一切ノ功德ノ藴ヲ皆悉ク至レル心ヲモチテ隨喜シ讃歎ス。（巻二）

こ訓まれるのであるが、之はコレガゴトキこ讀むことは殆ご動かないが、それが又皆の場合に通ずるこも限らな

い。寧ろ通常の場合と違ふから故らに點を加へたものと見られよう。如是(ク)といふのもあり、如是(ク)といふのもあるから、副詞形にはカクと訓んでもよさそうであつて、

時ニ釋梵等イ佛ニ白シテ言ハク如是(ク)クアルベカリケリ、世尊トマヲス。（巻三）

などは是である。又

佛言ハク善男子如是ナリ如是ナリ。（巻四）

とあるのなどはシカナリと訓んだらしくも思はれる。現に願經四分律には「如是」をシカナリと訓んでゐる所がある。しかし如是(キ)又は如是(キ)の場合はカキともシカキとも讀まれないのであるから、要するに如是の是字の多くの場合はコノ・コレノ・コレガ・カクノの何れかでなくてはならないことになる。それが此の經の點だけでは甚だ不明であるが、只如字だけには解決がつきさうである。是字は四つの何れに訓んだとしても如字はゴトシと訓んだらうより外思はれないからである。さて今の場合の「亦復如是」は下に來る叙述形であるから、「如是(シカ)ナリ」又は「是ノ如シ」といふのが普通の現在形であらう。之を未來形にすれば、「如是(シカ)ナラム」又は「是ノ如クナラム」といふべきであらう。然るに語末ケムは其の何れでもない。而して如字に其の點の附いてゐるのは、是字から如字へ反讀すべきことを示してゐるものであるから、「如是(シ)(カ)ナリ」の方でなくて「是ノ如シ」の方に從つたものであることは他の多くの場合に徴して明かである。さうすると、如シの未來形であつてケムといふのは、ゴトケムといふより外訓方はないやうに思ふのである。

しかしこの例は全十巻を通じて只一箇處であるし、私の狹い見聞は他に未だ類例を見出さないから、廣く行はれた形といふには薄弱ではあらうが、どうもこの加點の偶然の誤であることも言ひ得ないほど餘りに判然してゐるのである。たとひ個人的の用法としても存在したことだけは認めなくてはならないやうに思ふ。

「如是」は之をカクノゴトシと讀むのが普通になつてゐるから、この經に於ても之に從つて多くの場合さう訓んでおかうと思ふ。元來如是の字は通俗にはわかり切つて居た言葉と見えて、古點物に完全に讀まれるやうに加訓してゐるものに一寸出遭はないのである。願經四分律古點が終止形をシカナリと讀んであることは已述の如くであるが、副詞形や連體形には是字に反點を施し、如字にクやキを假名で送つたものがあり、其の中には是字にノの乎已止點を附けたものもあるから、其の讀方が略々想像出來るのである。地藏十輪經にも亦「如是」の是字にノの乎已止點の附けてあるのが見えるから、是字を何と讀むか分らないにしても「是ノ如シ」と反讀することだけは動かないやうである。法華經山家本裏書によれば、如の字について

字訓殘本於ニ如ノ一字ニ訓レカクノゴトクと

あり、我聞の二字について

訓讀本以ニ如是我聞ヲ讀レカクノゴトキコトヲワレキトタマヘキ　大師眞跡觀無量壽經讀レカクノゴトキコトヲバ禾レキトタマヘキ　同經ノ後伏見帝ノ宸筆本

かくのごとくわれきゝたまひきと

とある。やはりカクノゴトシと訓するのが總べての場合に通ずる最も普通の讀方となつてゐるやうである。（了）

（補注）萬葉集卷十八の「波流左禮婆、孫枝毛伊都追」（四一一一）のモイ（萌）もトドミと同類に取扱はるべきものであらう。山口栞にはこのモイに就いて說いてゐるが、尙この同類として和名抄の比伊須由禮流（冷酢）や古伊太流止比（寒鴎）紀に同訓。名義抄や塞字をコイといふ名詞形に訓んである。などを擧げて、ヤ行の中二段（今いふ上二段）と下二段とに活く例と言つてゐるが、これらは何れも連用形のみであるから、私は未然形の如何を待つてでないと、遽かに斷言出來ないと思ふ。卷五の等等尾は上二段らしくあるが同樣である。卷九の登等美を動詞とすると、四段活用らしく、私はやはり澁フに關係した語ではないかと思ふ。

（昭和七年十月十四日稿）